

# 活字 さらに美しく

## 鑄造職人55年 大松さんに「横浜マイスター」

横浜市南区の活版活字販売会社で働く活字鑄造職人大松初行さん(モウ)が先ごろ、市から卓越した技能を認められて「横浜マイスター」の称号を贈られた。大松さんは「これからも活字の魅力を多くの人に知ってもらえるように頑張りたい」とさらなる意欲を語る。

(阿部博行)

「難しいのは機械の微妙な調整と、油断するとやけどをすることかな」。大松さんが操作するのは、昭和中期に製造された活字鑄造機だ。活字の鑄型「母型」をセ

ットして四百度近い高温で溶けた鉛を流し込む。パイプから流れる水で冷やされて瞬時に固まり、金属活字ができあがった。

この道五十五年。注文が多かつ



金属活字鑄造機で活字を作る大松さん＝横浜市で

## 「魅力知ってもらえるように」需要激減も意欲

た時代より、いまの方が完成度の高い活字を作る自信があるという。「心を集中させ、きれいなものに仕上げる」ことができるからね。自分の思うようにできるので楽しいですよ」。光沢のある活字を手に取り、指先の微妙な感触で出来栄を確かめた。

出身は長崎県の平戸島。少年時代は素潜りが得意で漁師になるのが夢だった。高校を卒業し十八歳で現在も勤める「築地活字」の前身の会社に就職。「漢字が好きで出版会社で働きたかったのに、ここは印刷関係の会社だった」と笑う。

入社して初めのころは、大量の活字の在庫から必要な文字を選び出す「文選」や営業を経験した。「頑張れば、できる」がモットー。鑄造部門に配属されたときも「その信念でやってきたら自信になり、今日の自分がある」と振り返る。

活版印刷の衰退で活字の需要は激減し、いまや鑄造機を動かせる職人は全国に四、五人しかない。同社は活路を見いだそうと、金属活字そのものを製品化した活字カレンダーや活字ホルダーを一般向けに販売する。大松さんが作る美しい活字に期待がかかる。